長崎新聞　平成23年1月3日掲載

長崎大学 地域に世界にどう貢献

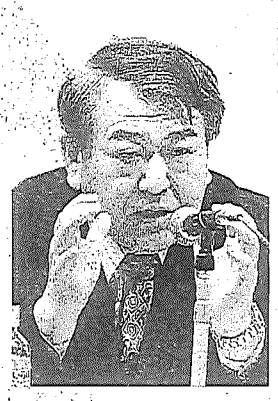
寺島実郎責任監修リレー講座

◆フォーラム　新しいアジア太平洋時代における長崎の「知」とは◆

長崎大学

■地域連携とアカデミズム連携を
■原点回帰し〝地域力〟引き出そう
■大学を地域に開き、若者育てたい

モデレーター
長崎大学長
片峰　茂氏



リレー講座監修
日本総合研究所理事長
多摩大学長
三井物産戦略研究所会長
寺島　実郎氏

世界で仕事をすると、自分の視座を固定していては何もできないということが見えてくる。我々は、自分の視座を相対化し、総合的にバランス良く物事を見ることができる医師を養成している。

寺島　長崎大学が日本のアカデミズムで放っている光の一つがここにある。第一線の研究者が世界中を駆け巡り、核汚染に立ち向かっていることを世界はもっと認識してもよいと思う。

山下　国連拠出金全体の2割近くを毎年拠出している日本だが、日本人国連職員は1%にも満たない。世界のリーダーとしての役割を果たしていないし、アジアの代表でもない。そういう人材を育成してこなかったのは大学の責任だと考えている。幅広い教養、歴史的な認識、使命感をもって学べる場を提供したい。

田上　外に出るたびに思うが、広島、長崎の使命は確実にある。それだけメッセージ力、発信力を持っているということでもある。

寺島　核なき世界に対する構想は夢物語ではない。米国のオバマ大統領は一歩踏み込み、挑戦しようとしている。日本も、例えば北東アジアの非核化を言い続けることが重要だ。平和利用に関しても、技術者を育てていないと世界での発言権さえなくなる。日本にとって技術の蓄積、技術者の育成は不可欠だ。

青木　私は長年、開発途上国で熱帯病の研究と対策に従事してきた。そのなかで、病気に対する住民の間違った認識やインフラの欠如など、開発途上国に存在する付帯要因により、西洋医学がもたらしたワクチンや薬などの熱帯病対策法の効果が発揮されていないことを痛感した。本リレー講座では西洋と東洋の思想の融合から生まれる新しい思想の構築の必要性が、多くの講師により強調された。疾病が流行する現場で、この新しいパラダイムに沿った研究が推進されれば、アフリカの熱帯病対策に有効な、長崎発の優れた研究が生まれるであろう。長崎大学は6年前にケニアに海外研究拠点を設置した。若い方々に、この拠点を活用した優れた研究成果を上げていただきたい。

寺島　ハイチの大地震でも、長崎大学の医師たちが先頭を切って現地に出向き、大変な貢献をしたと聞いている。SARS（重症急性呼吸器症候群）やAIDS（後天性免疫不全症候群）など、さまざまなウイルスが迫ってきている時代に果たす役割は重要だ。

技術に対する敬愛の気持ちの強さが日本の強さだ。アカデミズムをはじめ知の側にいる人たちが訴えないと、仕分け的目線ではとんでもない国になる。

片峰　長崎大学の三つ目の重要なプロジェクトとして「海」がある。長崎にとっても、日本にとっても海洋は重要だ。

寺島　海洋のポテンシャルが日本の未来を開くと考えている。日本の国土面積は世界61位だが、領海と排他的経済水域の面積は6位という海洋大国だ。海洋に踏み込めば資源大国になり得る。

しかし、日本は技術力や人材の質の高さ、資金力はあるが、プロジェクト化し、問題解決していくガバナンスに欠けている。生け花に例えると、花は何でもそろっているが、剣山がないから花が立たないということだ。

アカデミズムの役割は
歴史的アセットの理解促進

片峰　新しいアジア太平洋の時代に、長崎という町、そして長崎大学という地域のアカデミアは何ができるのか、何をなすべきかに焦点を絞ってシンポジウムを行いたい。

田上　変化の時代に大事なことの一つは、原点に帰ること。自分たちの町が何を持っているのか、アイデンティティも含めてしっかり確認し、その生かし方を時代に合わせて変えることが大事ではないかと感じている。

歴史や文化はお金で買えない。そういった一朝一夕につくれない財産を探し出し、生かし方をつくっていく一つの例が「長崎さるく」だ。

ローカルの力を引っ張り出すことで、グローバルに通用し世界の人たちにも価値を認めてもらう町になっていくと考えている。

寺島　長崎は歴史的なアセット（資産）を持っている。それがどういう文脈で世界史とつながっているのか、若い人たちにもっと徹底的に理解させることがアカデミズムやメディアの役割だと思う。

片峰　長崎において、長崎大学というアカデミアの果たす役割は大きい。すでに、いろいろな取り組みを開始している。

須齋　長崎大学では魅力ある教育を確立し、アジアの大学から学生たちが来て単位を取り、同時に本学の学生もアジアに出て行くという構想を進めている。そこでの経験が、資質を高める機会になるようにしたい。ま

アジアで学生の資質高める　須齋氏
海外での活躍が国際化の推進力　青木氏
早期の海外、現場経験が重要　山下氏

片峰　次に、長崎や長崎大学が、世界にどう貢献できるかを論じたい。長崎大学は「放射線医療科学」と「熱帯病・新興感染症」という二つの大きな研究プロジェクトを持っている。

山下　私の主たる仕事は被ばく者の診断と治療だ。20年来、核に汚染された旧ソ連邦でも働いてきた。

日本に不可欠な
技術蓄積と技術者育成

片峰　次に、長崎や長崎大学が、世界にどう貢献できるかを論じたい。長崎大学は「放射線医療科学」と「熱帯病・新興感染症」という二つの大きな研究プロジェクトを持っている。

山下　私の主たる仕事は被ばく者の診断と治療だ。20年来、核に汚染された旧ソ連邦でも働いてきた。

須齋　人文・社会科学でも、学生たちを現場に出すことで行動が変わってきている。現場での体験を通じて、学生が自ら進んで育っていくようにしたい。

青木　平成20年に開校した長崎大学大学院国際健康開発研究科では、劣悪な開発途上国の保健医療の改善に貢献できる人材を育成している。本研究科の修了生が海外で活躍してくれることが長崎大学の国際化のドライビングフォースとなると期待している。

田上　海外との精神的な垣根がなくなるのが大事だ。長崎の場合、子どもの頃にその経験をするチャンスがたくさんある。

長崎に来るとコミュニケーション能力が高まる、長崎で子ども時代を過ごすと外国との垣根がなくなるという町づくりを進めたい。

寺島　元気な地域には共通性がある。一つは国境を越えた地域連携。二つ目が、長崎大学にも期待することだが、アカデミズム連携だ。若い研究者と、地場の経営者の若い層が連携している地域は元気だ。

片峰　大学を社会にオープンにし、市民の力を借りながら若者や学生たちを育て、世界に送り出したい。地域のみなさんと一緒に、若者を育てることにまい進したい。

長崎だからこそ
世界に送り出せる人材が育つ

片峰　大学の最大の使命は人材の育成に

パネリスト

長崎大学理事（総務・情報担当）
須齋　正幸氏

長崎市長
田上　富久氏

長崎大学大学院
国際健康開発研究科長
青木　克己氏

長崎大学大学院
医歯薬学総合研究科長
山下　俊一氏

主催／長崎大学
共催／長崎新聞社
制作／長崎新聞社営業局

新しい「知」の創出を目指して。
2011年、長崎大学は挑戦を続けます。
長崎大学
NAGASAKI UNIVERSITY